



## 校長室だより～湘南の空～

第 27 号

令和 5 年 10 月 23 日

9 月 30 日、本校 57 回でセントラルフロリダ州立大学教授、バイオリニストの米谷彩子さんのミニリサイタルが本校歴史館で行われた。校歌斉唱に続く絃楽部との合奏で会場は温かい空気に包まれた。そして『荒城の月』の主題による変奏曲（滝廉太郎作曲、山岡耕筈編曲）、無伴奏パルティータ第 2 番よりシヤコンヌ（J.S. バッハ）は人生そのものを感じさせる名演だった。

事前に絃楽部を指導した米谷さんは「絃楽部の皆さんは上達が早く、成長が期待できる」と話してくださった。成長を続ける生徒の皆さんの今後の挑戦を心より楽しみにしている。

### ノーベル生理学・医学賞受賞「科学の営みは大変でも楽しく、幸せなこと」

新型コロナウイルスワクチンの基盤となった遺伝情報を伝える物質「メッセンジャーRNA (mRNA)」技術の開発に貢献し、2023 年のノーベル生理学・医学賞受賞が決まった米ペンシルベニア大のカタリン・カリコ特任教授 (68) とドリュー・ワイスマン教授 (64) は 2 日、米ペンシルベニア州の同大で記者会見に臨んだ。

初めて 2 人が出会ったのは 1997 年、大学内のコピー機を使うための列に並んでいたときだという。ワイスマン氏は「彼女と話し、mRNA が持つ可能性に気づいた」と振り返った。「論文発表も研究資金獲得もうまくいかなかったが、私たちは決してあきらめず、根気強く取り組んだ。だから、今ここにいる」と晴れやかな表情を見せた。(2023/10/03 読賣)

ワイスマン氏の「私たちは決してあきらめず、根気強く取り組んだ。」は印象的だ。本校 28 回生でノーベル化学賞の根岸英一氏の“Pursue your Dream with eternal Optimism.”「絶対にへこたれないで夢を追う」という精神が思い出される。また、カリコ氏は「何かの賞のために研究しているわけではない。大切なのは役に立つものを作ることだ。」と述べているが、本校 27 回生でセコム創業者の飯田亮氏の「大きな会社になったねと言われても、嬉しくもなるともない。社会にとってセコムはなくてはならない会社だね、と言われると本望だ」に通じる心だ。

生徒の皆さんには分野を問わず天分を発揮している人の哲学から未来を見てほしい。

### カリコ氏語録 (2023 年ノーベル生理学・医学賞受賞記者会見より)

「科学の営みは思い通りにならないことばかり。だが大変でも楽しく、幸せなことだ。それを分かってほしい」

「実験をしても、思い通りにいかないことが多い。科学の世界では失敗したときに対処する力を身に付けるのが重要だ」

「何でも考え、試してみるべきだ」

「いろんな人が話し合いするために大学にはもっとコピー機を置く必要があるかもしれない」

「良い教師がいて子どもが持つ好奇心を維持してくれれば、(自分がそうであるように) 科学者を目指すと思う」

「自分が生きている間に実現するとは思ってもみなかった」

「(女性へのエールとして) 夢をかなえる助けとなってくれ、あなたに尽くすより子育てをやってくれる適切な相手を見つけること。心身の健康を整えること。楽しむこと。誰かの言いつけに従ったり、お金をもうけたりするのではなく、問題解決が好きなのであれば、科学はあなたのものです」

### 湘南の自由

湘南創立 40 周年記念誌に第 4 代校長で英語教諭時代と通算して 30 年近く湘南に勤務した松川昇太郎氏の随想「湘南の自由」が掲載されている。

松川氏は湘南中学の創業時代のあの明るい、伸々とした、そして自律的な秩序に裏づけされた空気は、まさに湘南の環境にふさわしいよきものであったという。

さらに不思議に思えることは、赤木先生の意識にもかかわらずこの「自由」をわれわれが特に「自由」として意識することがないほど、広がりや厚みを持った自然なものであったために、時を経、所をはなれて、はじめて自由の空気のおおりが分かるということであった。

1921 年 (大正 10 年) 頃は大正自由教育が展開されつつあり、本校校歌の作詞者である北原白秋氏の教育における自由への希求の強さが伝わってくる。

『「赤い鳥」童謡 第八集』1925 年 6 月 23 日発行「子供の村」北原白秋

子どもの村は子どもでつくろ、／みんなでつくろ。／赤屋根、小屋根、ちらちらさせて、／みんなに住まうよ。

子どもの村は垣根なぞよそよ、／ほんたによそよ。／草花野菜あつちこつち栽ゑて、／すず風、小風。

子どもの村は子どもできめよ、／みんなできめよ。／村長さんを一人、みんなを選び、／みんなで代ろ。(中略)

子どもの村はいつでも子ども、／いつでも春よ。／子どもの祭、おてんとさんの神輿。／わっしよ、わっしよ、わっしよな。

奇しくも、湘南における生徒による高度な自治、ヒエラルキーのない自由な校風、豊かな風土、そして、日本一の体育祭を連想させる歌詞だ。湘南は赤木校長の「自由」への強い信念がバックボーンとなり発展してきたが、特に「自由」として意識することがないほど、広がりや厚みを持った自然なものであるからこそ湘南生に染み込み、「絶対にへこたれないで夢を追う」人生を支え続けてくれる。